

1993.4
第14号

博物館だより

大津市歴史博物館



— 伝説の歌人 —

小野小町展を開催

5月1日(土)～5月30日(日)

大津市歴史博物館では、平成五年五月一日(土)から五月三十日(日)まで、企画展「伝説の歌人―小野小町」を開催します。

小野小町は、平安時代前期の歌人で、「六歌仙」の一人として知られています。『古事記』『日本書記』に登場する伝説の美女で和歌三神の一人の衣通姫の流れをくむといわれ、小野篁の二男の出羽守小野良実の娘と伝えられていますが、伝説にすぎないようで、その生涯は謎につつまれています。そのため、後年、美女伝説や晩年の流浪・落魄伝説など、様々な伝説が生まれ、日本各地にその遺跡があります。また、能などによって普及した、「草子洗小町」「通小町」「鸚鵡小町」「関寺小町」「卒都婆小町」「雨乞小町」「清水小町」という七小町の説話が、小町をめぐる著名なエピソードとして、近世庶民に親しまれていました。

ここ大津にも、晩年には零落して逢坂山に隠棲したとの伝説が伝えられています。これは、室町時代に謡曲「関寺小町」などによって普及したものでした。

本展は、この伝説に彩られた歌人「小野小町」をとりあげ、美術・文学・芸能などに描かれた多様な小町像を集めて、小町伝説の様々を紹介しようとするものです。展示作品は、歌仙絵・歌集・絵巻・御伽草子・謡本・絵本番付・浮世絵など、七八件です。

なお、会期中、当館講堂で講演会と展示品解説を開催します。講演会は、五月十六日(日)午後二時から「能・歌舞伎の中の小野小町」と題して、権藤芳一大阪学院大学講師に講演いただきます。また、「展示品解説」は、五月二十二日(土)午後二時から、本館学芸員・中森洋が行います。詳しくは、大津市歴史博物館までお問い合わせください。

企画展の概要

I 歌仙・小野小町

歌仙とは、和歌の先達として敬う、優れた歌人のこと。平安初期の六歌仙や平安中期の三十六歌仙が有名ですが、小野小町はそのいずれにも選ばれていません。しかし、仁明天皇（在位八三三―五〇）の時代に宮廷に仕えた歌人であることが確かなだけで、その生涯は謎にまつまれています。そして、伝記不詳であるため後年、様々な伝説が生まれることになりました。

ここでは、歌仙として崇敬されてきた小野小町の側面を紹介します。

【主な展示作品】

三十六歌仙絵（県指定文化財、多賀大社蔵）

三十六歌仙図額の内、小野小町

（狩野孝信筆、徳川美術館蔵）

略三幅対（小野小町・衣通姫・女三之宮）

（鳥文斎栄之画、太田記念美術館蔵）

小町集（正保四年刊、大阪府立中之島図書館蔵）

小野小町像（徳川義直筆同賛、徳川美術館蔵）

女和歌三神像（小野小町・衣通姫・紫式部）

（田中訥言筆、奈良県立美術館蔵）

II 小町伝説

『小町集』に集められた小野小町の作とされる和歌に、様々な伝説が結び付いて、小町はその虚像をふくらませていきました。ことに、平安中期成立の『玉造小町杜衰書』との混淆が、小町の晩年の落魄伝説を生みさせたようです。この伝説は、室町時代頃から絵画や御伽草子となって一般に広がり、江戸時代にも様々な草双紙（大衆小説）にとりあげられてきました。

ここでは、小町の老衰・落魄の伝説を紹介します。

【主な展示作品】

卒塔婆小町之図（貞治六年、陽明文庫蔵）

神代小町絵巻（江戸中期、長瀬八幡宮蔵）

神代小町絵巻（江戸中期、野田八幡宮蔵）

玉造小町杜衰書（慶長十一年、叡山文庫蔵）

小町のさうし

（元和古活字本、天理大学附属天理図書館蔵）

III 能と小町（七小町）

小町伝説の普及に大きな役割を果たしたのは、能で



能面・小町（彦根城博物館保管）

した。現行の謡曲では、深草少将の百夜通いの伝説を定着させた「通小町」、晩年の落魄伝説を普及させた「関寺小町」「卒塔婆小町」や、小町の歌才の名を高めた「草子洗小町」「鸚鵡小町」があります。

やがて、江戸時代になると、先の能の五曲に、「雨乞小町」「清水小町」または「花見小町」を加えた「七小町」が、小町をめぐる七つの著名な逸話として定着します。

【主な展示作品】

光悦本謡曲百番（江戸初期、北野天満宮蔵）

能面・小町（享保八年、彦根城博物館保管）

草紙洗小町図（尾形光琳筆、京都市芸館蔵）

草子洗小町図

（松野親信筆、太田記念美術館Ⅱ表紙写真）

雨乞小町図（歌川広演筆、奈良県立美術館蔵）

観世流謡曲内外二百番（草紙洗小町）

（天和三年、大阪府立中之島図書館蔵）

IV 歌舞伎と小町



三十六歌仙図額の内、小野小町
（狩野孝信筆、徳川美術館蔵）

小町伝説は、江戸中期から歌舞伎・浄瑠璃化されていっそう普及しました。現行では、貞岑宗貞と小町との恋と、大伴黒主とのからみを筋立てとした「積恋雪関扉」と、小町と六歌仙の他の人物との色模様などを舞踊化した「六歌仙容彩」が知られています。

ここでは、この「関扉」と「六歌仙」を中心に、小町伝説の歌舞伎化を示す作品を紹介します。

【主な展示作品】

重重人重小町桜

(絵本番付、早稲田大学演劇博物館蔵)

積恋雪関扉

(初代歌川国貞画、阪急学園池田文庫蔵)

子供踊尺 宗定・関兵衛・小町姫

(歌川国芳画、名古屋テレビ放送蔵)

六歌仙容彩

(初代歌川国貞画、早稲田大学演劇博物館蔵)

V 見立絵の小町

江戸時代、小町伝説は浮世絵の画題としてもとりあげられ、人気を呼びました。多くは「七小町」の説話を趣向とした見立絵でした。見立絵とは、古典を題材にとり、その説話を当世風の人物・背景・小道具等で表現したものです。「七小町」の見立絵は、当世風の美人画の趣向として、小町の逸話を絵の中に隠し、いわば謎解きを楽しむものとしたものでした。

【主な展示作品】

(見立七小町) 雨こひ小町・あらひ小町・かよひ小町

・はな見小町・あふむ小町・せき寺小町・そとは小町

(歌川国芳画、神奈川県立博物館蔵)

収藏品紹介 ⑬

東海道分間絵図 一帖

江戸時代 縦一五・九cm、横九・一cm

江戸時代の後半、宝暦二年(一七五二)九月、江戸の万屋清兵衛を版元として出版された。木版画、折本仕立ての、いわゆる旅のガイドブックである。編集者の名は「桑揚」とあるだけで、詳しいことは不明。

この分間絵図と同名ものは、実は元禄三年(一六九〇)、文章が遠近道印、絵が浮世絵師・菱川師宣のコンピで出版され、かなりの人気を呼んだらしく、その後元禄十六年、正徳元年(一七一一)に再版されている。このときも折本仕立てであったが、サイズは縦二六・五cm、横一四・九cmと大きく、実際の旅に携帯するには適していなかった。そのため、宝暦二年になって普及版として、小型で懐にも入るようなサイズのもの、改めて出版されたのである。今回紹介するのは、その普及版である。

普及版は、当館蔵の宝暦二年版の他、明和九年(一七七二)、安永四年(一七七五)、さらに天明年間(一七八一―八九)と版を重ね、オリジナル版と同様人気があった。

凡例によれば、以前の分間絵図が出版されてから年月も経ち、道の付け替えられた所も多いので改正したほか、御城主、知行高などもことごとく改訂増補するなど、かなり内容的には以前より充実したようだ。

次に記述内容を詳しく見ると、江戸日本橋から京都三条大橋までの東海道沿線の名所や五十三次各宿場の町並、山川や渡船、城主の名前、次の宿場への距離、

要所での東西南北の指示、間道、立場と呼ばれる宿間に設置された休憩所、高札場などが詳しく記入されている。また驚くことには、一里塚の記入は当然としても、各一里塚ごとに、たとえば「榎一、松一」といったように、植えられている木の種類と本数までが紹介されているのである。

そして、ただそういった地図標記だけではなく、街道を行く旅人や湖上を進む帆かけ船などの簡単な絵(イラスト)も随所に挿入され、旅するものが見ても楽しいように配慮されている。

江戸時代も一八世紀頃となると、趣向を凝らした旅のガイドブックが数多く出版され、庶民の旅もより便利になっていった。冒頭には、「定めえし、旅立つ日どり善し悪しは、思いたつ日を吉日とせん」といった狂歌が載っているが、これなどは、庶民にとって旅がいかに気楽なものになっていったかを如実に示すものといえよう。

(種爪 修)



博物館の催しもの

博物館日記抄

2月2日
4月3日

展覧会

◇「伝説の歌人・小野小町展」

(期間) 五月一日(土)～五月三十日(日)

◇「琵琶湖の船展」

(期間) 七月二十八日(水)～九月五日(日)

◇「古代の宮都ー大津京展」

(期間) 九月二十九日(水)～十一月十四日(日)

講演会

◇「伝説の歌人・小野小町展」記念講演会

(題名) 能・歌舞伎の中の小野小町

(日時) 五月十六日(日)

午後二時～三時三〇分

(講師) 権藤芳一(大阪学院大学講師)

講座

◇(題名) 小野小町展展示品解説

(日時) 五月二十二日

(講師) 中森 洋(本館学芸員)

◇(題名) 和綴本をつくる

(日時) 五月二十九日(土)

(講師) 榎 英一(名古屋市博物館学芸員)

*開始時間はいずれも午後一時三〇分(九〇分)

講座

座(親子の体験講座)

(題名) 大津の歴史と文化を学ぼう

(日時) 五月八日、六月十二日

*開始時間はいずれも午前十時(九〇分)
詳しくは市歴史博物館へ

2月2日 第14回運営会議開く

4日 仰木小学校児童来館

5日 富士見小学校児童、安澤順一郎氏(文部省来館)

6日 第59回土曜講座「大津京Ⅰー最新の発掘調査成果」(松浦俊和学芸員、県書道協会書初め展開かれる(11日まで))

12日 博物館収蔵品収集審査会開く、第60回土曜講座「大津京Ⅱー大津京をめぐる人々」

13日 親子歴史講座開く、清水善三氏(京都大学)・宮本忠雄氏(県教委)・堤靖之氏(産経新聞社)来館

14日 館内旅行(亀岡の史跡を訪ねて)

18日 第5回博物館企画委員会開く

20日 第61回土曜講座「大津京Ⅲー壬申の乱」

22日 西教寺展事前資料調査(24日まで松阪市)

24日 安藤広道氏(横浜市ふるさと歴史財団)来館

25日 「大北斎展」搬入、アギョン氏(パリ国立図書館学芸員)、ウイクター・ハリス氏(大英博物館日本部長)来館

26日 井上満郎氏(京都産業大学)来館

27日 第62回土曜講座「古文書で旅をしようⅠ」

樋爪修学芸員

3月1日 大北斎展開場式およびレセプション開催(一七八名)

2日 大北斎展一般公開、第15回運営会議、館内会議開く、加藤芳太郎氏(中央大学)来館

5日 開館以来鑑賞者二十万人を達成、山田大津市長から川口和子さん(大阪市)に花束・記念品を贈呈、嘉田由起子氏(琵琶湖博物

館開設準備室)・片岡義道氏(京都薬科大学)来館

6日 第63回土曜講座「古文書で旅をしようⅡ」、県立大津商業高校駐車場を臨時駐車場に借用させていただく(今期中、土・日曜日)

13日 記念講演会「北斎ー人と作品」(講師永田生慈太田記念美術館副館長、親子歴史講座、一日鑑賞者一七八五人を数え新記録、旧営林署跡地を臨時駐車場として利用)

14日 館収蔵庫内の熏蒸(16日まで)

16日 専修大学文学部学生、産経学園来館

20日 第64回土曜講座「古文書で旅をしようⅢ」

21日 大北斎展一万五〇〇〇人を数える、岡本義生朝日新聞社大津支局長・木村至宏館長から川合芳弘さん(小浜市)に記念品を贈る

当日開館以来の企画展鑑賞者最高の一万五二八三人を超える

23日 朝日カルチャーセンター岡山の受講生来館

29日 西教寺展事前資料調査(水口町・中主町)

30日 当館主幹西川丈雄氏退職し長浜市へ転勤

4月1日 第16回運営会議、館内会議開く

2日 大北斎展鑑賞者二万五〇〇〇人目の古田裕美子さん(大津市)に山田市長・岡本支局長から記念品を贈呈

3日 西教寺展事前資料調査(守山市)

博物館だより 第14号

発行日 平成五年四月二十八日

編集 大津市歴史博物館

発行所 大津市御陵町二二一

大津市歴史博物館

電話(〇七七五)二二二二〇〇代